

大阪への提言

人・都市・大学へ

「雰囲気」というもののもつエネルギー

— “大阪” にあこがれの響きを —

OSAKA



河原 碧子

人間が命を守るために、衣食住に関して工夫する知恵のあつまりが、文化であるといわれる。文化の基盤は命を守ることである。森羅万象、ものの命は土から始まっている。かつて土は人間にとって故郷であり、河とともに母なるものであった。障子をあげれば緑があり、季節きせつの陽の光が差し込

んでくる。手のとどくところに土があり、地面を低くたゆたう風のそよぎが、時折頬をやさしくなで、心をなぐさめる。虫も鳥もそれぞれに鳴き啼き、飛びかい、草々の匂いがふんと鼻先をくすぐる。それらはもう遠い夢となってしまったのであるうか。現代では、超高層化されていくビルや住宅、そして、それに何の抵抗もなく高い抽選率で競って入居しようとする人々。二十一世紀に生きようとする人々は、果して人間として生きようとしているのであろうか。その意識には疑問を感じる。人間のことを思えば、まだまだ工夫の余地がありそうに思う。イギリスなどでは、高層ビルをつぶして三階建くらいのタウン・ハウスにしているという情報すらある

というのに、今さら超高層でもあるまいと思う。

夕方になって、ひっそりとうす暗い街灯にてらし出された冷たい道や、ぴったりととざされた鉄の扉と、コンクリートの壁のつづく広い道にうつし出された黒い影。人間がふえるに従って、いや増す不安感や恐怖感。人かげも疎らな、わびしい、コンクリートの道が前途を暗示しているようである。

「ほっこりとした」という言葉や、霧囲気の暖かさに飢えた、うら若き乙女たちが、最近の風潮では、その暖かさを温泉に求めているのではないか、というジョークさえ思い浮ぶのである。ファッションにしてからさえ、一九三〇年代のレトロブームなのである。子供や青年たちの未来は今や、息もつか

せぬ経済の活性化や、超高層のコンクリートの建造物にかこまれ、おしつぶされようとしている。加速度を加える時代のめまぐるしさに疲れはて、息ぎれしているかに見える。彼らの心は、不透明な時代の光の中をさまよっている。そして帰りつくコンクリートの箱の中の暮しには、やすらぎや憩いを見出せないのである。大都会、大阪の中からもどんだん大阪が消えていくという現状に、たまたぬ寂しさを感じるのは、はたして女の感傷だけなのだろうか。人間が人間らしく生きようとするなら、生きていく環境づくりは、最大の目的でなければならぬ。生き生きと楽しんでいる人間像なくして、何の経済成長であろう。愛すべき子孫の未来に思いをはせる

時、識者の方々の叡知の發揮を急務と強く感じるのである。

「机上の空論ではなく」である。

いたる所に見られるカサカサの街路樹やしおれた草花に、人間の生命の現状が、はつきりと示されているのを、誰もがお気づきであろう。今後ますます複雑化するであろう「社会の仕組みの変化の速さ」に、普通の人間はともついてはいけない。こうした中で「次の世代に必要なものは何か」ということは最先端の情報や科学技術でも予測することは出来ない。今、大阪を思うにあたり「雰囲気」というもののもつエネルギー」の重要性について考えてみたい。デザイン等の世界でも、目的は、「機能的なもの」「合理的なもの」「役立つもの」を最も

よい形態や色彩で表現することだけであると思われる。

しかし、これ程世の中に物があふれている現状において、デザインするということは、唯「機能的」「合理的」「役立つもの」をつくるということだけではないように思う。物と情報の氾濫の中で疲れ切っている現代人の生活の中に、どれだけ「快く思われるもの」や「安らぐ雰囲気のもの」「見るだけで美しいもの」を取り入れていくか、ということが重要になっている。そして、今人切なのは、それを選ぶ眼を養っていくことではないだろうか。この「眼」をつくるため、一般の人々にも、美しいものや、機能的なものについてある程度の勉強が必要である。よいものを見る眼があれば、よいものを選択したり、

よい振舞ができたりして、自然により環境が出来る。この「眼」を養うためにデザインの勉強をさせているが、デザインが芸術と異なるのは必ず「社会とのかかわり」があつてそれが何であるかを、よく考えなければならぬ点である。これからの社会生活を考えてゆくにあたり、いかに気持ち（ハート）を表現し、現実化していくかということが、大きな命題となるであろう。このことは、恐らくヨーロッパのパリやローマといった街の先達が、頭脳ばかりではなく、気持ち（ハート）の眼で見ようとしていたであろうものと同じテーマである。目に見えないもの、たとえば、人間一人ひとりの生き方、すなわち生活こそ、文化そのものである。さまざまな人間がさ

まざまな興味ある生き方をする。「十人十色」というが、そこそ最も創造的なことであろう。どんな生き方をするか、ということこそ、この世に生を受けた人間に課せられた「価値ある課題」である。

しかし、そこには、おのずから環境や習慣等の制約があり、私たちは次の世代のためにもよい雰囲気づくりをしておかねばならぬ必要性がある。このムード作りは「形」に「気持ち」をそえることから始まる。建物には情緒を、道には安らぎを、そして経済にも文化の一つとしての更なる自覚を求める。唯「忙しすぎる」ということによつて、心の豊かさや、愛情や、夢が失われ、人と人、自分自身との闘いが生じ、その結果大

切なヒューマニテイが枯れ果ててしまいかねない。そこには意味のない厭世観さえ生まれ、人々から、希望の芽をつみとつてしまう。かつての大阪人には、そんな低い次元での忙しさは感じなかった。文化や、趣を考える空間があり、時間があつた。そして、たゆまず勤勉に働きながらも、考えていたではなかったか。大阪という土地柄のもつ真の豊かさの恩恵に浴し、また自らも大阪に豊かさを与えていた。人々の文化的な生き方に、本当の意味で、よい環境を与え、又、人々の気持ちを受けいれるゆとりのある、そんな「素敵な大阪」を今、私たち一人ひとりが頭でなく気持ちを集集させてつくり上げていきたい。

二十一世紀にむかい国際情報都市として、はなばなしの発展をとげようとしている途上にあつて、一人ひとりの役割は重要である。ゆとりのある心で広く世界に、人間としての高い知性と文化を示すきめのこまやかさと、色々な分野の方々と楽しく交流する明るさを期待したい。多くの人が大阪に深い愛着を感じ、この土地のよさとともに日本の伝統や風習を世界に示すことよつて、「大阪」ばかりでなく日本の真の良さが世界に知られることになり、国際情報都市としての面目躍如たるものになる。故に、この土地を構成する一人ひとりの生きてゆく姿勢には、お互いにていねいに目をむけていきたい。先に「よいものを見る眼があれば自然によりものを選択

したり、よい振舞が出来たりするのではないか」と述べたが、これはひとえに各人の文化に対する思い入れなのである。諸兄の大阪発展に対しての暖かく、鋭い目が、形あるものばかりにとらわれず雰囲気づくりにも注がれんことを祈る。

大阪、おおさか、OSAKA、よい響きではないか。文化を、活気を、エスプリを感じる。そんな気持ちを、日本の、そして世界の人々に抱かせたい。

（生活科学部昭32卒・生活科学部同窓会々長・日本画家・テクノポート大阪推進委員・河原デザインスクール理事長）